



私がくじらの博物館で教育普及活動に携わるようになつてから、早いもので15年が過ぎました。今では、多い時で週4回教壇に立つこともあります。教育普及活動を通じて「地域に開かれた博物館」をつくること、つまり博物館が地域の人々にとって身近な存在であり、日常的に活用されるものになること、これは博物館学芸員を目指した当時から今まで変わらない私の夢です。そんな私にとって、クジラに関する生物学的資料、捕鯨を中心とした歴史文化的資料、そして生きた鯨類を飼育展示しているくじらの博物館は、クジラという生き物を多面的に伝え、理解してもらうための教育普及の場として

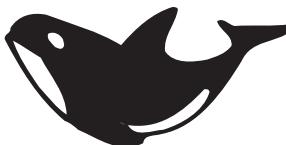
●夢を抱いて15年  
「ねえ、中江さんこれ知ってる?」この言葉をたくさん子どもたちから引き出すこと、私は日々の教育普及活動の中でこれを心掛けるようにしています。子どもたちが自ら知りたいと思う意欲、知らないことを知る喜び、そしてそれを人に伝えたいという気持ちを育てることが、子どもたちの学びを豊かなものにする上でとても重要だと感じています。



私がくじらの博物館で教育普及活動に携わるようになつてから、早いもので15年が過ぎました。今では、多い時で週4回教壇に立つこともあります。教育普及活動を通じて「地域に開かれた博物館」をつくること、つまり博物館が地域の人々にとって身近な存在であり、日常的に活用されるものになること、これは博物館学芸員を目指した当時から今まで変わらない私の夢です。そんな私にとって、クジラに関する生物学的資料、捕鯨を中心とした歴史文化的資料、そして生きた鯨類を飼育展示しているくじらの博物館は、クジラという生き物を多面的に伝え、理解してもらうための教育普及の場として

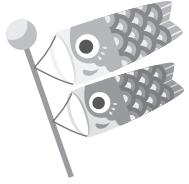
## 「くじらの博物館と」 教育普及活動

くじらの博物館副館長 中江 環



第323号  
発行日 令和5年5月1日

●発行 ●  
太地町公民館



理想の場所だと感じています。「せっかく町にこんな素敵な博物館があるのだから、もつと地域の人にも活用してほしい。特に子どもたちには、知る楽しさを感じてほしい。」と考えたことが、今の博物館と学校、さらには博物館と地域との連携体制を作りきつかけとなっています。

### ●「ゾクツ」体験に溢れた太地町

さて、皆さんは博物館がお好きですか？ 私は幼い頃から生き物が好きで、両親にせがんで頻繁に動物園や水族館、そして博物館に連れていくつてもらっていたことを記憶しています。目の前を躍動感溢れる動きで通り過ぎる動物たちや迫力ある骨格標本や剥製、そして昔の人々の暮らしを伝える歴史資料の数々、いわゆる「ホンモノ」を目にしたときを感じる、背中が「ゾクツ」とするような感覚は、皆さんにも覚えがあるのではないでしょ？ この「ゾクツ」体験は、知りたいという気持ちを引き出す上で、とても重要な要素です。太地町には、豊富な生き物を育む熊野灘、捕鯨の歴史を伝える史跡や資料、そしてそれらを集約する博物館など「ゾクツ」体験の素材

●五感を使ってクジラを学ぶ  
「くじら学習」は、総合的な学習の時間などを活用した地域学習プログラムです。全学年が年間を通じ、地域の特性である「クジラ」を主軸にしたテーマに沿って学習します。学年ごとのテーマは、学習進度や教科書で扱う内容などを考慮に入れて設定しているのが特徴で、子どもたちの興味関心を持続させるために、単発ではなく継続したプログラムになるよう工夫しています。学習内容は、クジラの骨格標本をロープで測り取り、黒板や体育館といった学校の身近な設備と比較することでの大きさを体感するなど、五感を用いた博物館ならではの体験にすることを重視しています。また、地域の利点を活かしたプログラムもあります。例えば3年生のプログラム「パートナーをさがそう！」では、当館で飼育している9種類のクジラからパートナーとなる種を選び、1年間継続して同じ種類を観察し、「リアル」なクジラの生態を感じてもらいます。同じ種類を観察することによって季節や体調に変化があることに気づき、複数の鯨種を扱うことや、図鑑などでは伝わりにくい種ごとの形態や生

●地域に開かれた博物館を目指して  
博物館を目指して、太地町には、豊富な生き物を育む熊野灘、捕鯨の歴史を伝える史跡や資料、そしてそれらを集約する博物館など「ゾクツ」体験の素材

●地域に開かれた博物館を目指して  
博物館を目指して、太地町には、豊富な生き物を育む熊野灘、捕鯨の歴史を伝える史跡や資料、そしてそれらを集約する博物館など「ゾクツ」体験の素材

●地域に開かれた博物館を目指して  
博物館を目指して、太地町には、豊富な生き物を育む熊野灘、捕鯨の歴史を伝える史跡や資料、そしてそれらを集約する博物館など「ゾクツ」体験の素材